

## 初級後半の口頭表現指導について

—タペストリー・アプローチを参考に—

茜 八重子

### はじめに

本稿では、Scacella and Oxford (1992) が提唱するタペストリー・アプローチを参考に、口頭表現能力を養成するためのシラバスを考え、そして実践し、その結果から今後の授業の指針となるべき点を探りたいと思う。今回は特に教室活動として行った「ショート・ディスカッション」に焦点をあて、口頭表現指導のなかで果たした役割について述べたいと思う。

### 1. 口頭表現とは

#### 1-1. 先行研究

口頭表現とは何か。また、何ををもって口頭表現というのか。口頭表現についての定義づけは、未だに確立されていない。

谷口(1989)は、「教科書の会話文を暗記して口頭で練習するのが口頭表現であって、会話(2人以上の参加者によって、音声言語を使って行われる社会的相互作用)から区別されなくてはいけない」と述べている。つまり、口頭表現と「会話」を区別して捉えている。

一方、斉藤(1978)は、口頭表現の基本はもちろん日常会話にあるという視点に立ち、口頭表現は文字表現に対する概念であって、聴解(聞く)を前提として成立する。そして、考えたことを表現する、つまり「話す」ことだとしている。

谷口は「口頭表現」と「会話」を区別しているが、私見では「会話力がついた」というのは「コミュニケーション能力が伸びた」とか、「対話力がついた」とも考えられる。なぜならば、コミュニケーション行動は言語を媒介として発生し、それが対話、あるいは会話成立の基礎になるからである。例えば、談話練習のような定式化された機能会話の学習後に、ペア又はグループワークで場面に応じたスキットを作って発表する練習などがそうである。本稿では、齊藤の考えに沿って論を進めていく。

## 1-2. 口頭表現の活動内容（注1）

口頭表現には大きく分けて、次の「対話」と「独話」の二領域がある。

- ・対話：あいさつ（日常場面での決まったやりとり）

質問 応答 許可求め・許可与え 依頼・断り 伝言 意見  
忠告・助言 能力 議論 演劇

- ・独話：伝達（自己紹介後にクラスメートのプロフィール作成など）

説明（日本と自国の文化や考え方の違いなどの比較）

口頭発表（決められたテーマ、自由テーマで発表）

初級では対話がかかなり長期にわたって先行する。それは、ことばが基本的には質問と応答という構造の上に成り立っているからである。そして、実際上の必要から言えば、質問とそれに対する応答練習は、バランスよく作るように指導されるべきである。

独話の最初の形態は自己紹介に見られるような伝達である。自己紹介は実際上の必要もあり、くりかえす必要もあり、余力があれば徐々に枝葉をつけていくこともできるので、恰好の独話形態である。初級の半ばになれば簡単な説明ができるようになる。比較の表現を習えば、二つの会社の比較、商品の比較などそれほど難しくない。初級の後半になれば事件の発生・経過・結果・影響など、かなりのことが言えるようになる。中級では、対話系列では議論ができること、独話系列では口頭発表ができることなどが目安として挙げられる（齊藤 1978, p.4～5）。

## 2. タペストリー・アプローチ

### 2-1. スキル統合の理念

Scacella and Oxford (1992) は、コミュニケーションにとって言語の主要スキル (listening, speaking, reading, writing) と補助スキル (文法, 学習スキル, 句読法, 発音, 語彙) の統合の必要性を指摘し, 次のように述べている。

言語指導はスキルの統合により, 全ての主要スキルと補助スキルが相互に発達する。これは言語形式の詳細な部分よりも内容そのものの学習を促進する。自然なインタラクションやコミュニケーションを行うためには, 学習者に言語の主要スキルと補助スキルを統合する機会を豊富に与えることがきわめて重要である。タペストリーの主題は, これら二つのスキルを統合し, 巧みに調和させた図柄とみなすことができる (p.121 ~125)。

現実問題として, 言語教育は一度に一つの技能のみで教えることは不可能である。実際には, 一つの技能は他の技能に関わってくる。口頭表現のクラスを例にとると, まず, 教師は口頭で指示をおこなう。学習者は内容を把握するために聴解 (聞く) 技能を活用し, 質疑応答で話す技能を使う。そして, 与えられた教材を理解するために語彙や文法などの補助スキルを用いる。しかしながら, このタスクの焦点は常に「話す」ことに当てられる。

Scacella and Oxford は, 「一つに技能の練習は他の技能の発達を促進させるが, 他の技能の練習の完全な代用とはならない。しかし, そこには相乗効果が生じてくる」と述べている。これが「タペストリー・アプローチ」の理念でもある。

### 2-2. タペストリー・アプローチの指導モデル

#### 2-2-1. 内容重視の指導法

Scacella and Oxfordによれば, スキル統合の最も重要なタイプの一つは内容重視の指導であり, これには三つのモデルがある。その中で最も大切なのが「テーマ重視」の指導モデルである。テーマは学習者にとって興味深く, 多様な

言語形式や言語機能が練習できるものでなければならないと述べている。そして、この指導における教師の役割は、次の2点に絞られる。

- 1) 学習者がコミュニケーション能力を発達させるよう援助すること。
- 2) 特定のテーマと関連する概念や用語を紹介したり、一般的な学習方略を指導すること。

### 2-2-2. タスク重視の指導法

これにはペア・ワークやグループ・ワークのようなコミュニケーション・タスクが含まれる。このタスクは形式よりも意味に関心が払われ、オーセンティックな言語での理解や表現を行う、インタラクション中心の活動である。

Scarcella and Oxfordは「言語学習におけるインタラクションは、教師や学習者間の熟達者などから適当な援助が与えられれば、さらに言語習得が促進される」と述べている。タペストリー・アプローチでは、上述の二つの指導法が統合される。

### 2-2-3. 方略的トレーニング

Scarcella and Oxfordによれば、方略的トレーニングとは「話す能力を効果的に発達させるための要素である」とし、次の4点を挙げている。

#### (1) 文法能力

スピーキングの「正確さ」にとって重要な要素である。

#### (2) 社会言語能力

より熟達した学習者や母語話者と話す機会を持つことによって、適切な言語使用（言語使用域、発話行為、イントネーションなど）ができるようになる。

#### (3) 談話能力

この能力は話す能力の向上を目的とした「流暢さ」と「正確さ」を増す言語活動に関与する。この能力により、会話における発言交替（会話で発言を変えたり、一時停止したり、相手に発言させたりすること）ができ、会

話の開始、会話の修復、継続などができる。

#### (4) 方略的能力

この能力により、効果的にコミュニケーションを行うことができる。また、種々のトピックを話題にしたり、それに加わることができる。

### 3. 口頭表現指導の実際

#### 3-1. 対象者

今回の指導対象者となったのは、2001年度春学期のために4月に来日した17名で、日本語学習歴は本国で数カ月から3年程度と幅が広い。例年、口頭表現クラスは3から8レベルまでであるが、春学期は教務の都合上4から8レベルになったため、全員4レベルに属した。口頭表現指導にとって17名は多人数であるが、クラスでは次ような学習効果を期待する。

- 1) 多人数であっても適切な方略が与えられれば、会話力、コミュニケーション能力が伸びるようになる。
- 2) 多人数のクラスでは、むしろ異言語間の相互作用が活発になり、母語話者対非母語話者の関係と変わらない、またはそれ以上の学習効果が期待できる。

表1 学習者の内訳

国籍 中国:7 (内台湾3, 香港1) 韓国:5 ドイツ:2 オーストラリア:1 タイ:1 内モンゴル:1 計17名
--

#### 3-2. 授業計画と使用教材

タペストリー・アプローチの指導理念に沿って、90分2コマ使用で、以下のような授業計画を立てた。

- 1 時間目: 1) 「対話」関連の学習項目を使い、必要に応じて文法にふれながら、談話練習を通じて定式化された表現の習得、スキット

作り（主にペア・ワーク）、発表と、インタラクションの機会が増えるようにする。タスクでは、発音や文法使用の正確さ(Acuracy)も指導目標の一つとする。

2 時間目：1) 「独話」関連の学習時間とし、各自が自由な雰囲気の中で発表したり、意見を述べたりする。口頭発表を通じて、お互いの国の文化や考え方を共有する。発表では流暢さ(Fluency)を尊重する。

### 3-3. 授業シラバス

シラバスには Scarcella and Oxfordが提唱する方略トレーニングの要素1) 文法能力, 2)社会言語能力, 3)談話能力, 4)方略的能力に, p.89の1-2で述べた授業項目をリンクさせた。授業は週一回(90分授業 2コマ)で全14回であったが、休講1回と会話テスト1回のため、指導実数は12回となった。実際の授業では、助詞の復習(口頭練習で助詞の誤用が多いためと文レベルでの発音練習を兼ねて)でスタートし、以下のシラバスに沿って進んだ。そして、会話力がついてきた 5週あたりの2限目に、本稿で紹介する「ショートディスカッション」を導入した。これについては、p.94 の4. で詳しく紹介する。

なお、以下の1, 2, 4, 9, 11 の指導項目では、口頭表現指導のために大学側が作成した練習教材を使わせていただいた。

表2 授業シラバス

指導項目	主な指導内容
1 レベルと場	コースの説明, レベルと場に合った自己紹介 自分の日常生活や周囲のことについて説明
2 許可求め・与え	教室使用の許可求めの言い方 教師に早退の許可をもらう言い方
3 質問・応答	質問の前置き表現「ちょっと伺いますが／よろしいでしょうか／すみませんが」を使い、尋ねる。

	また、それに対する応答の仕方「はあ、どんなことですか／何でしょうか／何ですか」を使い、応答練習する。
4 尋ねる	授受動詞を使って、丁寧に尋ねる表現 礼の言い方、それに対する答え方
5 考え・意見を言う	「～と思います／～んじゃないですか」など、間接的な言い方
6 説明・描写	電車で忘れ物をしたことを想定し、動作の完了の言い方を入れた機能表現
7 電話	電話で伝言を頼んだり、また、頼まれた伝言を人に伝える言い方と機能表現
8 司会・討論	発表や話し合いに必要な表現や発表者紹介の言い方
9 依頼・断り(1)	「～していただけませんか」を使い、手紙や論文、作文などを見てもらうための機能表現
10 依頼(2)	「～(さ)せていただけませんか」の使役形を使った依頼表現
11 面接	アルバイトや会社での面接を想定した機能表現
12 挨拶・スピーチ	日本で経験した出来事の中で良かったこと、悪かったこと、残念だったことをとりあげて発表

#### 4. ショートディスカッション

##### 4-1. ショートディスカッション導入の目的

ショートディスカッション（以下SD）とは、1-2（p.89）で述べた「対話」の議論・意見陳述と「独話」の口頭発表をミックスしたもので、原稿の準備は他の発表と変わらないが、内容は「要旨文」に相当する。

第一の学習目的は、学習者が日本での生活を通して得た知識、強く感じたことについて問題を提起し、互いに意見を出し合い、互いの考え方や新しい発見を共有すること。第二は、討論形式にして学習者に話す機会を与え、さらに全員参加をねらいとしている。学生にはSDのシート（注2）と模範例を渡し、次の1）

から7)の順序で進んだ。

- 1) テーマ決定のための話し合い。
- 2) 原稿の準備：添削2回をメドに教師によるコンサルテーション。
- 3) 発表開始：5つのキーワードを提示。キーワードについて説明を加える場合もある。
- 4) テーマについて、自分の意見／考えを説明する。
- 5) みんなへ質問する。
- 6) みんなで意見を出し合う。
- 7) 発表者はみんなの意見をまとめ (summarize) で発表し、しめくくる。

表3 SDのテーマ

性別	国籍	発表テーマ
女	オーストラリア	日本の暴力漫画
女	韓国	日本人は自分の主張をどう表すと思いますか
女	韓国	日本の学校の「いじめ」について
女	韓国	日本の外来語ーカタカナ英語ー
男	韓国	日本の祭りと集団文化について
男	韓国	日本の喫煙の問題について
女	タイ	インターネットのデート
女	台湾	パチンコをすること
女	台湾	出会い系サイト
女	台湾	辛い東京のサラリーマン
女	中国	公共バスでの携帯電話の使用禁止について
女	中国	一期一会
男	中国	困ったことがあったら警察を尋ねましょう
男	香港	男女平等について
女	ドイツ	席をゆずるマナー
男	ドイツ	必要のない包装
男	内モンゴル	大学生と酒



#### 4-2. 発表内容の紹介

紙幅の関係上、ここでは17名の発表者の中から、討論の白熱した2名の発表について紹介する。文中の \_\_\_\_\_ は訂正の必要な箇所であり、( ) の言葉は教師による添削例、または添加例である。意見交換の文は、筆者によるメモと録音テープから再現した。また、「みんなへの質問」は、項目ごとに意見交換 (p.97) を行った。

例(1)

日本語学習歴: 台湾で1年	日本で3か月	(女性)
* テーマ	<u>辛い東京のサラリーマン</u>	
* キーワード		
通勤	commute	交通渋滞 traffic jam
距離	distance	ラッシュアワー rush hour
出社	attend office	
退社	leave office	
* テーマについて何を知っていますか。どう思いますか。		
<p>私は電車で学校に通っています。毎日、電車に乗っている時、人が沢山いるし、非常に混んでいるので、電車に乗るのはとても<u>疲れると思います</u> (疲れます)。時々、電車の中で人が眠っていますが、特にサラリーマンが多いです。会社へ行く時と戻る時に、<u>彼たち</u> (彼ら) は本当に疲れているようです。</p> <p>東京には会社や人が集まりすぎると思います。ほとんどの人は郊外に住んでいます。サラリーマンは郊外から毎日出勤して、会社やオフィスで働きます。距離が遠いから、(電車に) 乗る時間も長くなり、体も疲れると思います。出社や退社の時間に交通渋滞になるので、(車の) 運転ができません。それに、タクシーも高いから、乗られないのです。</p> <p>東京のサラリーマンは本当に大変だと思います。</p>		

\* みんなへの質問：

1. みなさんは（電車）通学ですか。通学すること（通学）は疲れますか。
2. ラッシュアワーで電車が込んでいる時、何を考えていますか。
3. 東京の生活と皆さんの国の生活と、どちらの方が大変ですか。
4. 東京には会社や人が集まりすぎると思いませんか。別の国（あなたの国）も同じ状況ですか。

〔意見交換〕

（1.の質問に対し、ほとんどが電車通学と答えた）

タイ： いつも、とても疲れるし、時間のムダだと思う。タイは電車がいないから日本で初めて経験する。（教師：でも、タイでは交通渋滞がひどいって聞いたけど..） そうですね。ひどいです。

オーストラリア：

私は寮に住んでいるから大学に近いです。タイと同じようにオーストラリアに電車がいないから、もし電車で通学したら、毎日疲れると思う。

中国： 中国はバスが多い。乗る人が多いから、とてもこんでいる。人のマナーも悪い。

韓国（女）： 電車に乗っている時は授業のことやアルバイトのことを考える。  
（ほとんどの学生がうなづく）

ドイツ（女）：

ドイツでは、大学の寮に入るから、ラッシュアワーを経験したことがない。でも、東京の生活の方が便利だと思う。電車通学だとイヤなこともある。例えば、チカンとか。

オーストラリア：

あー、私、チカンの経験がある。

ドイツ（女）：

日本の男の人は、髪の色が違う人にすると思う。例えば金髪の外国人とか..  
..だから、アジアの人はあんまりないと思う。

ドイツ (男) : (4. の質問について)

東京は日本の首都だから、人や会社が多いと思う。どこの国でもそうでしょう？

韓国 (男) : ソウルも同じです。 以下、省略。

例(2)

日本語学習歴 : 韓国で2年 日本で3か月	
* テーマ	日本の外来語 (カタカナ英語)
* キーワード	
外来語	a loan [borrowed] word      疑問      a question
台無し	～にする spoil, ruin      ～になる be spoiled [ruined]
言葉	speech, a language      切ない painful
* テーマについて何を知っていますか。どう思いますか。	
ある日、日本人に「Spoonって日本語で何ですか」と聞きました。彼女は、「Spoon という意味の特別な日本語はない」と答えました。しかし辞書を引いた時、Spoon という意味を持つ “さじ” という言葉を発見しました。どうして日本人は “さじ” にかわって “スプーン ”, “牛乳” に代わって “ミルク”, “複写” に代わって “コピー” という言葉を使うのでしょうか。コンピュータとかインターネットなどのように、新しい言葉ばかりでなく、 unnecessary な外来語もたくさん使っています。さらに日本人は、外来語を元の発音とは全然違う日本式発音を使っているのを見ると、“ どうして外来語を使おうとするか ” という疑問を持つようになりました。	
日本語はとても美しい言葉だと思いますが、外来語の多すぎる使用が日本語を台無しにしている感じがして切ない (残念だ) と思います。	
* みんなへの質問	
1. 日本で使われている外来語のせいで、理解できない時がありますか。	

2. みなさんの国では外来語をたくさん使いますか。
3. 日本のカタカナ英語についてどう思いますか。

〔意見交換〕

ドイツ（男）：外来語は本当に難しい。発音を聞いても、言葉の意味がわからなくて困ったことがある。

オーストラリア：日本人はどうしてたくさん外来語を使いますか。わたしは英語を話すから、とても混乱します。

タイ：私もそうです。

香港：英語の発音でもない。本当の日本語の発音でもない。意味が全然わからない時が多い。

韓国：韓国でも外来語を使う。でも日本語の方が多いと思う。私は日本でなくて、韓国でとても恥ずかしいことがありました。韓国で会社に勤めていた時、日本からビジネスマンが来て、私に「コピーを三部、すぐお願いします」と言ったから、私はすぐ「コーヒー」を三つ持って来ました。そのビジネスマンはとても変な顔をしたんですが、意味がわからなかった。もう一度聞いてわかった。コピーでなくて、コーヒーだった。

（学生たちは意味がわからないので、教師が、「韓国語でコピーは英語のコーヒーの意味でしょ？」と助け船を出すと、全員笑う。）

韓国人の発表者：あー、そうですね..

中国：中国でもあるけど、多くない。似ている音を漢字で書いて発音する。日本のように、別な字で書かない。

タイ：（教師に）外来語はどうしてカタカナで書くんですか。

以下、省略。

## 5. 成果と問題点

### 5-1. 成果

SDの結果からは、日頃自身が考えている問題をクラスで提起し、それを全員

で考えようとする姿勢が伺えた。そして、日本での生活を通して得た知識や考え方、また、自身もつ本来の価値観を交えた話し合いがなされたように思う。

例1の発表者は「電車の中で眠っているサラリーマンが多い」とか、「住宅事情のために遠距離通勤をしている」という現実の異文化体験をもとに「東京のサラリーマンは本当に大変だと思う」と述べている。発表者の学生は、クラスでは目立たなく、それに日頃、文法や発音面に大きな問題があったが、本人の努力でとても良い発表になった。

例2の発表者の初稿はほぼ完璧だった。「切ない」のような言葉の使い方に唯一問題があったが、発表時は声が小さくて、なにか暗い感じがした。注目すべき点は、発表者のように、自国での「外来語」使用の現実をあまり把握していなかったが、同国人の意見提出で身近かに起こっている現実を認識したことである。授業を通してこのような認識が大切だと思われた。筆者には、なぜ「コーヒー」が韓国語では「コピー」になるのかわからないが、笑えない問題でもある。

最終回に行った無記名でのアセスメントの結果（フォーマットは資料1参照）では、15名中10名が「会話力が良くなった」と答えている。そして4名が「あまり変わらない」と答え、1名は2枚目書き忘れのためか、無回答となっている。また、この授業の良かった点として、以下の(1)から(10)のように、具体的な回答が寄せられた。

- (1) SDが一番良かった。
- (2) SDはとても楽しかった。
- (3) クラスはいつも面白かった。
- (4) 先生が学生に参加することを促進した（すすめた）。
- (5) いろいろな situation で使える会話をたくさん練習した。例えば面接とか電話の練習。
- (6) SDとスキットを使って話すのがいい。
- (7) 授業の資料の選択がいい。
- (8) 自分の考えや言いたいことを表現できるチャンスがあって良かった。
- (9) 状況に合った会話ができるようになった。

- (10) 会話学習の前は全然使えなかったが、いろいろな単語が使えるようになった。

## 5-2. 問題点

「会話力が以前とあまり変わらない」と答えた4名中1名が「どうしてあまり変わらないと思うか」という質問については、「クラスの人数が多かったから、あまり話す機会がなかった」回答している。他3名はこの点について白紙であるのが気になる点であるが、自己評価表（資料2参照）では1名が全部C（ふつう）で、2名はB（良い）とC（ふつう）となっている。

また、「会話力が伸びた」と答えた学生から授業について次のようなコメントがあった。なお、下の(6)の回答は、「これまで学習したことを土台に、さらに話す機会をもっともちたい」とも理解できる。まとめると次のようになる。

- (1) スキットがちょっと多かった。
- (2) 会話より文法中心にしたと思う。
- (3) 学習者の中にレベルの違いがあるようだ。
- (4) 言うチャンスが少なかった。
- (5) 学生が多くて会話練習がよくできない。
- (6) もっと勉強したいです。

## 7. まとめと今後の課題

ここではSDの結果を中心に述べ、まとめとする。SDについての評価法はA（大変良い）からE（良くない）までの5段階を設定した。

表4

回 答	人 数	SDについての評価
1. 会話力が良くなった	4	A（大変良い）
	7	B（良い）
	1	C（ふつう）

2. 会話力があまり 変わらない	1	A
	1	B
	1	C
3. 無回答	1	B
計16		

5-1. (p.99) で述べたように、SDは大変好評であった。上記の結果からSD導入には16名中14名が満足し、「会話力があまり変わらない」と答えた2名と、「無回答」1名もSD導入には好意的だったことがわかった。前ページの5-2.(3)で「学習者の中にレベル差がある」と答えた学生も、SDについてはBと評価している。このような結果を相対的に判断すると、SD導入は学習レベル差がある多人数のクラスでも充分可能だとわかった。

また、5-1.で述べたように、「SDは楽しかった」とか「SDが一番おももしろかった」というコメントの意味するものは、1) 日本での生活を通して得た知識、強く感じたことについてクラスで問題提起し、2) 互いに意見を出し合うことによって、3) 異言語間の相互作用が活発になり、4) 得られた知識がさらに内省化を促進する、というSDの趣旨に沿ったためと思われる。発表関連のタスクは一般に行われているが、「独話」と「対話」をミックスしたSDは学習者に準備のための負担があまりかからず、かつ様々な知識が共有できたことが好評だったことを確信した。

今後の課題として、5-2.の「問題点」で述べた(4)と(5)の2項目について検討し、日本人ボランティアを入れるなど、具体的な対策を考えたいと思う。

付記：本稿は「多人数の口頭表現指導についての考察」(2001年)に、大幅に加筆、訂正を加えたものである。

(注1)シラバス作成にあたり、斉藤(1978)と川本(1999)の「口頭表現」のための学習項目を参考にした。

(注2)SDシートは、草野(2000年国際部)作成を使用。

## 引用・参考文献

Scarcella, R.C. and Oxford, R.L. (1992) *The Tapestry of Language Learning: The Individual in the Communicative Classroom*, Heinle and Heinle Publishers.

牧野高吉監修, 菅原永一他訳, 松柏社出版

齊藤修一 1978 「口頭表現の指導方法について」『日本語と日本語教育』7号

谷口すみ子 1989 「会話教育のシラバス作りにむけて」『日本語教育』68号  
日本語教育学会

当作靖彦 1985 「コミュニケーションの能力を助ける日本語クラスー理論と実践ー」  
『日本語教育』56号 日本語教育学会

1991 「文法とコミュニケーション能力発達の関係ー日本語のクラスでの  
実験をもとにした考察ー」『日本語教育』73号 日本語教育学会

梶 弘巳 1988 「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」『日本語  
学』3月号



資料1

下の1～4の質問に答えて下さい。

1. これまで、あなたは会話の学習を中心にした授業を受けたことがありますか。

はい (       )      いいえ (       )

「はい」と答えた人：あなたの国で？      日本で？

- それはどんな授業でしたか。
- 「口頭表現4」のクラスとくらべてどうですか。

2. あなたの会話力は良くなったと思いますか。

はい (       )      あまり変わらない (       )      いいえ (       )

「はい」と答えた人

- たとえば、どんなことですか。

「あまり変わらない」と答えた人

- どうして、そう思いますか。

• 「いいえ」と答えた人

- たとえば、どんなことですか。どうしてそう思いますか。

3. この授業の良かった点について、書いてください。

4. この授業のあまり良くなかった点について書いてください。

資料2 自己評価表(じこひょうかひょう: self evaluation)

1. あなたは小グループ・ディスカッションや Pair Workで、どのくらい  
貢献(こうけん:devote)したと思いますか。1～5までの数字で示しなさい。

(評価: A=大変よい, B=よい, C=ふつう, D=あまりよくない,  
E=よくない)

1) Small Group Discussion に参加(さんか)した

A B C D E

2) Short Discussion に参加した

A B C D E

3) ロール・プレイに参加した

A B C D E

4) クラスの発表(dialogues presentation など)に参加した

A B C D E

5) 自分が発表したことをクラスメートが理解してくれた

A B C D E

6) 自分は良い発表ができた

A B C D E

7) 質問する時、できるだけ詳しく説明した

A B C D E

8) わからない時、質問して確かめた

A B C D E

9) 自分で話したいことが言えた

A B C D E

10) ほかの人の意見を聞くことができた

A B C D E

11) ほかの人が言っていることが理解できた

A B C D E

12) 正しい文法が使えた

A B C D E

13) ほかの人にあなたの情報(じょうほう:information)を  
伝えることができた

A B C D E

14) 話している時、適当(てきとう:appropriately)に

賛成か反対を言うことができた

A B C D E

15) クラスでは、内容に合った(match~with) 貢献(こうけん)をした

A B C D E

2. 何か意見があったら書いてください。